

コラム① 相談支援の現在地とこれから

～当事者の“こう暮らしたい”に寄り添う地域づくりを目指して～

令和7年度東京都自立支援協議会セミナー基調講演登壇者

特定非営利活動法人 日本相談支援専門員協会 名誉顧問 福岡 寿さんの講演から

東京都自立支援協議会では、協議会活動の普及啓発を図る取組として、「当事者が望む地域生活を支える相談支援とは何かを考える」と題し、令和7年12月12日にセミナーを開催しました。基調講演では、創成期から相談支援に関わってこられ、平成26年度のセミナーにもご登壇いただいた福岡 寿さんから、情熱とユーモアあふれる「福岡節」で、本質を突く貴重なお話をいただきましたので、ここでご紹介します。

相談支援の仕事は、ニーズを拾い上げ、サービスにつなげ、支援会議を開くという「顕在化」の仕事ですが、課題を顕在化させず「潜在状態」に留めることも非常に重要な仕事です。それを支えているのが「重層的相談支援体制」です。しかし、計画相談だけでは決して成り立ちません。委託相談や基幹相談との確かな連携があってこそ、この体制は形づくられるのです。

例えば、発達障害は生まれた瞬間に診断されるわけではなく、本人にとって不本意な環境に置かれる中で、二次的問題として適応障害となり、発達障害と診断されるわけです。重層的相談支援体制がある地域では、委託相談や基幹相談の「前さばき」（早期段階での多職種連携や幼保小での縦横連携等）により、適応障害や発達障害にならないための取組が行われます。一方で、この「前さばき」がない地域では、潜在状態で留めるべきものが顕在化され可逆性が高く、頑張れるお子さんに対しても、自動的に児童発達支援につなげることが正しい仕組みだと誤解されているところもあります。

このような体制では、既に課題が顕在化され、どうサービスにつなげるのかが決まったうえで、後追いのプランをつくることになります。計画相談が形骸化し、今のサービスをつなぐだけの仕事になり、結果的に「事業所のための利用者」となってしまうのです。ここに計画相談をやる方の内発性があるのか、心が動くのか、やりがいがあるのでしょうか。

基幹相談支援センター等、困難事例に対して適切な助言ができるスーパーバイザーの存在は、計画相談に新たな視点をもたらし、理解を深めることにつながります。また、地域事業所間の連携も重要です。地域協議会後の立ち話や何気ない情報交換から、地域の事業所がお互いの得意分野で補い合うように連携ができれば、本人中心の支援体制が整い「利用者のための事業所」として、計画相談のやりがいが生れます。



セミナー登壇時の福岡さん

また、自立支援協議会が活発なところは、ミクロ（個別支援）とメゾ（中間管理職等）、マクロ（行政や組織レベル）の連携がとれています。特にメゾが熱い想いを持って機能していることが重要です。メゾが現場の課題をマクロへ共有し、マクロが地域協議会にあげることで地域の体制づくりにつながっていくのです。

計画相談は重層的相談体制が豊かな土壌に咲く花です。日々、心が動く仕事ができているかどうか。皆さんの地域の相談支援の現在地を振り返ってみてください。